

災害ボランティア 活動上の事故事例集 (安全確保のポイント)

令和7年12月
中部管区行政評価局

はじめに

目的

- 令和6年能登半島地震（令和6年奥能登豪雨を含む。）では、復旧・復興の様々な局面で災害ボランティアが被災者支援活動を行っています。総務省中部管区行政評価局では、ボランティアの安全確保を推進することを目的に、ボランティア活動上の事故の発生状況について情報収集を実施しました。
- この事例集は、石川労働局、石川県社会福祉協議会及び県内市町社会福祉協議会の協力を得て、ボランティア活動内容別によくある事故事例と安全対策のポイントを取りまとめています。
被災地でボランティア活動を行う上で、本事例集をご活用いただければ幸いです。

情報収集の概要

期間

令和6年1月～7年7月に発生した事故

（令和7年8月5日までに社会福祉協議会に報告があったもの）

対象

石川県社会福祉協議会及び石川県内で災害ボランティアセンター（災害VC）を設置した
12市町社会福祉協議会

事故件数

75件（紹介事例数：15件）

1

ボランティア活動上の事故の発生状況

| p3

2

活動内容別の事故事例

● 活動内容01 がれきの撤去

| p4

● 活動内容02 泥出し

| p6

● 活動内容03 清掃・片付け

| p7

● 活動内容04 家財の搬入・搬出

| p8

● 活動内容05 災害ごみの搬出・運搬・分別

| p12

● 活動内容06 活動前後の移動

| p18

3

おわりに

| p19

1 ボランティア活動上の事故の発生状況

- 令和6年能登半島地震におけるボランティア活動上の事故発生状況を活動内容別にみると、「災害ごみの搬出・運搬・分別」が25件（33.3%）と最も多く、次いで「家財の搬入・搬出」が15件（20.0%）、「がれきの撤去」が12件（16.0%）となっており、上位3つで事故全体の約7割（69.3%）を占めています。
- 事故の型別にみると、「動作の反動、無理な動作」（重い物の持ち運びによる腰痛等）が14件（18.7%）、「切れ、こすれ」（ガラス片による切傷等）が12件（16.0%）、「転倒」（つまずき、滑りによる骨折等）が11件（14.7%）発生しており、上位3つで事故全体の約半数（49.3%）を占めています。

活動内容別・事故の型別の事故発生状況

(件)

活動内容 \ 事故の型	動作の反動、無理な動作	切れ、こすれ	転倒	はさまれ、巻き込まれ	激突	墜落、転落	有害物質等との接触	飛来、落下	踏み抜き	崩壊、倒壊	激突され	高温・低温の物との接触	交通事故（道路）	合計
がれきの撤去	事例1 7		1	1				1		事例2 1	1			12
泥出し		事例3 1			1		1				1			4
清掃・片付け					事例4 3	1	1			1				6
家財の搬入・搬出	事例5 4	1	1	3	1	事例6 2	事例7 1	事例8 2						15
災害ごみの搬出・運搬・分別	1	事例9 10	事例10 3	事例11 4	1	事例12 1	1		事例13 3			事例14 1		25
活動前後の移動	1		事例15 4		1								2	8
その他	1		2			1						1		5
合計	14	12	11	8	7	5	4	3	3	2	2	2	2	75

(注) 「事故の型」は、厚生労働省の「事故の型分類表」（令和6年）の分類に基づいて分類

2 活動内容別の事故事例

がれきの撤去

活動内容 01

事例1

がれきが入った土のう袋を持ち上げたとき、ぎっくり腰になった



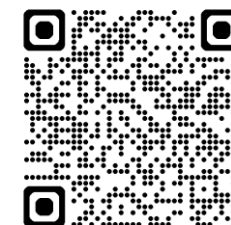
活動者の情報	60代女性	事故の型	動作の反動、無理な動作	傷病名（部位）	ぎっくり腰（腰）
発生状況	がれきの撤去作業中、土のう袋を持ち上げたときにぎっくり腰になった。				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none">・一度にたくさんのがれきを運ぼうとして、土のう袋にがれきを入れ過ぎた。・持ち上げる際の作業姿勢が適切でなかったため、腰部に負担がかかった。				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none">・土のう袋に入れるがれきの量を調節し、重くならないように注意すること。・重い物は無理に一人で運ばず、複数名での作業を検討すること。・重い物を持ち上げる際は、腰を下げて持ち、腰部に負担をかけない姿勢をとること。				



ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件を事故の型別にみると、「動作の反動、無理な動作」（重い物の持ち運びによる腰痛等）が14件と最も多く発生していました。
- ✓ ボランティア活動では、人力で重い物（がれき、災害ごみなど）を運ぶ作業がたくさんあります。厚生労働省は、職場における腰痛予防対策として、常時人力のみにより取り扱う重量の目安を示していますので、参考にしてください。（出典）「職場における腰痛予防対策指針」（厚生労働省）

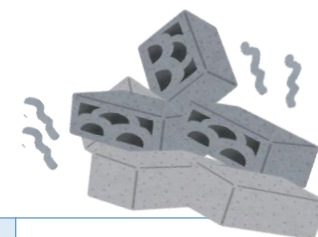
【重量の目安】
■ 18歳以上 男性：体重のおおむね40%以下（体重60kgで24kg）
■ 18歳以上 女性：体重のおおむね24%以下（体重50kgで12kg）



▲ 厚生労働省HP

事例2

積み上げて運んでいたがれきのブロックが崩れてきて、手を打撲した

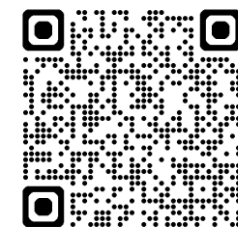


活動者の情報	40代男性	事故の型	崩壊、倒壊	傷病名（部位）	打撲（手指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> がれきの撤去作業中、積み上げられたがれきを手で運んでいた。 上に積み上げていたブロックが崩れてきて小指の先をはさみ、打撲した。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> がれきの大きさは均等でなく、材質も木材、ガラス、コンクリートなど様々。一度にたくさん運ぼうとしてがれきを積み上げたことにより不安定な状態となり、バランスを崩しやすかった。 重たいブロックを上置いていたことにより、落下時のけがのリスクが高かった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> 人力によるがれきの運搬は軽量にし、できる限り運搬用具を使用すること。 がれきの倒壊や落下時の危険を防止するため、がれきを人力で持ち運ぶ際は、重い材質のがれきは下にする。 がれきの集積・積み上げ等の作業を行う際は、崩壊、倒壊のおそれのある正面位置には立たず、脇から積み上げ作業を行うこと。 				



ポイント

- ✓ 地震により倒壊した建物などのがれき処理は、ガラスで手指を切ったり、倒れてきたり落下してきた物に当たるなど、多くの危険を伴います。
- ✓ 厚生労働省は、「がれきの処理における留意事項～がれき処理作業を行う皆様へ～」（リーフレット）を作成しています。ボランティア活動前に本リーフレットを参考にして、安全に活動してください。



事例3

泥等を一輪車で運んでいたとき、横に置いてあったガラスで手を切った



活動者の情報	50代男性	事故の型	切れ、こすれ	傷病名（部位）	切傷（手指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・奥能登豪雨災害で床上浸水した建物の泥出し作業で、泥に混じっていたガラスを取り出し分別する作業をしていた。 ・一輪車で泥等を運んでいたとき、取り出して横に置いてあったガラスが手に当たり、手の甲を切った。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・手袋をしていなかった又は防刃性・耐切創性のない手袋をしていた。 ・通行する可能性のある場所に、危険な物（ガラス）が放置されていた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・泥の中にはくぎやガラスなどの鋭利な物が混ざっているため、泥出し作業中は、厚手で長めのゴム手袋など（防刃性・耐切創性のある手袋）の着用を徹底すること。 ・ガラスでけがをする危険性を想定し、泥から取り出したガラスは一箇所にまとめるなど、周辺の整理を行い、安全な通路を確保すること。 				



ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件のうち、「ガラス」で手や足にけがをして医療機関を受診する事故が8件ありました。割れたガラス戸や食器などが原因でけがをする事例は、地震災害でも豪雨災害でも発生しています。
- ✓ ガラスによる事故を防ぐには、手袋の着用が必須（軍手だけではNG）です。災害の種類によって活動時に必要な服装が違いますので、全国社会福祉協議会のホームページを参考にして、十分な準備をお願いします。



▲ 全社協HP

事例4

軽トラックの清掃作業中、荷台から降りる際に靱帯を切った



活動者の情報	40代女性	事故の型	激突	傷病名（部位）	靱帯断裂（脚）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動に活用していた軽トラックをレンタカー会社に返却する前に、泥などを落とす清掃作業をしていた。 ・軽トラックの荷台から降りる際に、ふくらはぎの靱帯を切った。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・洗車していたことから、地面が水に濡れており、足を滑らせやすい状態だった。 ・軽トラック荷台の地上高は1mもない高さであったため、着地面の状況を確認せず飛び降りて足をひねった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・トラックの荷台から降りる際は、前向きに飛び降りず、荷台の床などに手を置き、足場を確認しながら後ろ向きにゆっくり降りること。 ・トラックの荷台に昇降する際には、昇降用のタラップ、ステップ、踏み台等の昇降設備を使用すること。 ・滑りにくい靴を使用すること。 				

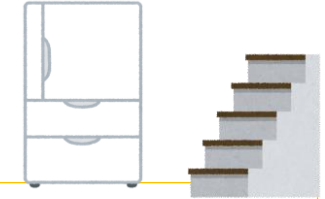


ポイント

- ✓ 陸上貨物運送事業（トラック運送事業）における労働災害では、トラック荷台から降りるときの事故が多発しています。また、清掃業における労働災害では、床面や通路を滑って転倒する事故が上位を占めています。
今回の情報収集でも、「トラック」に起因する事故が10件、雨や雪で路面が濡れていて滑った事故が3件発生していました。
- ✓ ボランティアの皆様は、普段行わない慣れない作業をする場合が多いため、経験が少なく事故に遭うリスクが高い状況にあります。「ボランティア活動には様々な危険がある」ということをまずは知っていただくことが、安全確保への第一歩です。

事例5

引越し作業中、冷蔵庫を運んでいるとき階段で踏ん張り、肉離れを起こした



活動者の情報	40代男性	事故の型	動作の反動、無理な動作	傷病名（部位）	肉離れ（脚）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・地震被害で住めなくなった市営住宅の棟から、別の無事な棟への引越しボランティアをしていた。 ・作業中、冷蔵庫を運搬しているとき階段で踏ん張り、太ももの裏が肉離れを起こした。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・階段という不安定な場所で力を入れたため、脚に急な負担がかかった。 ・重い物を無理な体勢で長い距離運んでいた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・重量物を取り扱う作業では、急激な身体の移動をなくし、前屈やひねり等「不自然な姿勢」をとらないように注意すること。 				



ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件のうち、「階段」の昇降時に起きた事故は5件ありました。階段や段差は転倒などの事故が起きやすい場所とされており、荷物を持って階段を昇降する際は一層の注意が必要です。
特に、重い物、大きい物、重心が偏っている物、運びにくい形状の物を運ばざるを得ない場合は、十分な人数で力を合わせることや器具を利用することを検討してください。
- ✓ 作業開始前や、重量物を取り扱う場合は、事前にストレッチを行うようにしましょう。

事例6

一人で大型の家財を2階から1階に下ろそうとして、指を骨折した



活動者の情報	60代男性	事故の型	墜落、転落	傷病名（部位）	骨折（手指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> 被災家屋で作業中、住民からその場で依頼を受け、一人で大型の家財を2階から1階に下ろそうとした。 階段を踏み外して落下し、床と大型家財にはさまれた指を骨折した。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> 一人で作業するには無理な内容だったが、被災者からの予定にない依頼をその場で判断し引き受けてしまった。 階段で重い物を一人で運んでいたため、バランスを崩した。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> 被災者から新たな依頼を受けた場合は、危険な作業を伴う場合があるため、災害V Cに依頼を受けたことを報告し、指示を仰ぐこと。 重い物を無理に一人で運ばず、複数名での作業を検討すること。 				



ポイント

- ✓ 一般のボランティアが行う作業は、事前に災害V Cに依頼があり、調査が済んだものが原則です。現場で予定外の作業を依頼された場合、引き受ける前に、どう対処すべきか災害V Cに相談してください。
- ✓ 自分のできることを見極め、例え被災者に頼まれても、自分や周囲を危険に巻き込むような作業は引き受けないようにしましょう。

事例7

引越し作業を行った後、結膜炎の診断を受けた



活動者の情報	30代男性	事故の型	有害物等との接触	傷病名（部位）	結膜炎（目）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・引越し作業中、家具の搬出時に粉じんが目に入った。 ・後日病院を受診したところ、結膜炎の診断を受けた。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・地震の後、家具や床に積もったほこりがボランティア活動によって舞い上がった。 ・防じんゴーグルを着用していなかった又はゴーグルを外して作業していた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・ほこりが立つ場所での作業を行う際には、目を保護するため、ゴーグルを着用すること。 ・作業中に粉じん等が目に入った場合及び作業後は清潔な水で手や目を洗浄すること。 				

ポイント

- ✓ 倒壊・浸水した建物から出る粉じんや泥は、細菌やカビだらけです。目に入って結膜炎になったり、吸い込んでのどや肺に炎症を起こすこともありますので、目や口・鼻を保護することが重要です。
- ✓ 石川県のホームページに、被災地での片づけ作業時等における注意点（粉じんをはじめ、外傷・感染症など）がまとめられていますので、参考にしてください。
- ✓ 暑い時期でも、特にコンタクトレンズを使用している場合は、ゴーグルを外さないで作業に当たってください。



事例8

荷物を下ろしていたとき、誤って家電が入った箱を足の上に落とし、打撲した



活動者の情報	40代女性	事故の型	飛来、落下	傷病名（部位）	打撲（足指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・トラックから家電などの荷物を下ろす作業をしていた。 ・誤って家電の箱を足の上に落としてしまい、打撲した。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・トラックの荷台から家電の入った箱を下ろす際に、手が滑って足の上に落としてしまった。 ・荷物を上げ下ろす作業が続き、集中力が低下していた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・大型又は重量物のある家財の搬入・搬出は、グループの複数人で声掛けしながら行うこと。 ・重量物を取り扱う作業を行うときは、対象物の落下等から足先を保護するため、つま先部に先芯を装着した「安全靴」を使用すること。 ・活動中はこまめに休憩をとり、無理な作業である場合は、ボランティアリーダーに報告して指示を仰ぐこと。 				



ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件のうち、物（がれき、家財、災害ごみなど）を持ち運ぶ際に起きた事故が41件（54.7%）あり、災害ボランティア活動上の事故の多くが物の持ち運び時に発生していました。
- ✓ 普段よりも頻度が高く、重い物を、長く、遠くまで運んでいると、疲労がたまり、けがや事故につながります。自身を守るだけでなく、被災者の家財の保全にもつながりますので、疲れを感じる前に定期的に休憩をとるようにしてください。

事例9

土のう袋を持ったとき、とがった破片で指を刺した



活動者の情報	40代男性	事故の型	切れ、こすれ	傷病名（部位）	刺傷（手指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・災害ごみの搬出中、土のう袋を持ったときに、とがった破片で指を刺した。 ・同日病院を受診し、破傷風の予防接種を受けた。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・持った土のうの中に、ガラスや陶器など、鋭利なごみが入っていたことが分からなかった。 ・手袋を使用していなかった又は防刃性・耐切創性のない手袋を使用していた。 ・複数人で作業しており、周りのペースに合わせるため急いでいた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・災害ごみの片付け作業に当たる際は、鋭利なごみに触れても破れない丈夫な手袋を使用すること。 ・袋の外観から中身の状況を見ながら、自分のペースで急がずに作業に当たること。 				

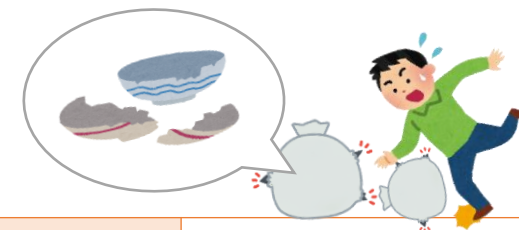


ポイント

- ✓ 被災地では、土のう袋に土や泥だけでなく、細かいがれきやごみを入れることがあります。
- ✓ 中身の見えにくい袋などを取り扱う場合は、鋭利な物が入っているかもしれないという認識を持って作業する必要があります。また、多くの量を一度に運ぼうとすると、袋が体に接触することになりやすく、けがの原因になります。袋にとがった物が含まれていないかどうか、外観を見ながら少量ずつ運搬するように心がけてください。
- ✓ 傷口に土が付いたり、がれきやくぎなどでけがをした場合は、破傷風になるおそれがあります。傷口をよく洗い、医師の診察を受けてください。

事例10

土のう袋につまずき、その上に転倒して割れ物が脚に突き刺さった



活動者の情報	50代女性	事故の型	転倒	傷病名（部位）	刺傷（脚）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・地震被害を受けた家の中で片付け作業をしていた。 ・割れ物を集めて土のう袋に入れ、置いていた。 ・別の物を数人で持ち上げて移動していたときに、その土のう袋につまずいて、土のう袋の上に転倒し、中に入っていた割れた陶器が脚に突き刺さった。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・災害ごみの運搬をしており、両手が塞がっていたため、足下がよく見えなかった。 ・複数人で作業するときの目配り、声掛けが十分でなかった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・危険な物（割れ物）を置く場所を定めてグループ内で共有しておき、その場所は通行しないこと。 ・災害ごみ等を複数人で運搬する際は、互いに十分な周囲の目配り、声掛けを行うこと。 				

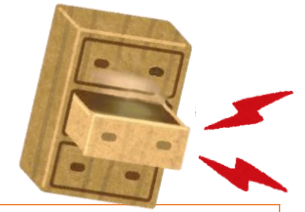


ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件を活動内容別にみると、「災害ごみの搬出・運搬・分別」時の事故が25件と最も多く発生していました。
また、転倒事故は、実際にボランティアが受傷者となった事故全体の2/3を占めるとされています（「ボランティア活動あんぜんハンドブック」（全国社会福祉協議会））。
- ✓ 大きな物、重い物を運んでいるときは、注意が荷物に向き、周囲の状況を確認する意識がふだんより低くなる上、荷物によって視界が制限されます。通路の安全を事前に確保することで、周囲の物との激突、つまずきを予防しましょう。

事例11

荷台からタンスを下ろしていたとき、スライドする戸に指をはさまれ、骨折した



活動者の情報	60代男性	事故の型	はさまれ、巻き込まれ	傷病名（部位）	骨折（手指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・災害ごみ仮置場で、二人で軽トラックの荷台からタンスを下ろす作業をしていた（手にはゴム製のグリップが付いた手袋を着用）。 ・その際、タンスを受け取る役のボランティアがスライドする戸に指をはさまれ、骨折した。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・タンスの戸が急に開閉する危険性を想定しておらず、戸の開閉部分に手を置いていた。 ・戸が動かないように固定又はタンスを梱包していなかった。 ・二人作業時の相互の声掛けが十分に図られていなかった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・可動する部分や隙間がある物を運搬する際は、指をはさむ危険性を想定し、固定や梱包などの予防策を講じ、取扱いに注意すること。 ・相互の声掛けを頻繁に行うこと。 				



ポイント

- ✓ 消費者庁・国民生活センターには、ドアなどの隙間に手指をはさむ事故の情報が医療機関から寄せられています。はさまれ事故は、場合によっては、指の骨折や切断などの重傷に至ることもあり、注意が必要です。
- ✓ 災害ごみは、破損した家具や家電、ガラス・陶器など様々な物が含まれます。事故やけがの懸念があることに留意して、必要な装備を事前に用意した上で活動してください。

事例12

災害ごみ運搬中、側溝に気付かず、踏み外して足の指を骨折した



活動者の情報	40代男性	事故の型	墜落、転落	傷病名（部位）	骨折（足指）
発生状況	・家屋から大きな災害ごみを4人で搬出していたところ、蓋のない側溝に気付かず、足を踏み外し落ちて骨折した。				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな災害ごみの搬出をしており、足下と前方がよく見えなかった。 ・あらかじめ目的地までの経路の安全を確認していなかった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・視界が妨げられるほどの荷物を持って移動する場合は、可能であれば、台車や一輪車の使用を検討すること。 ・災害ごみ等を運搬する際は、蓋のない側溝を通らないように、カラーコーンを置くなどして対策し、安全な通路を確保してから作業を行うこと。 				



ポイント

- ✓ 視界が妨げられる荷物を持ちながら蓋のない側溝の近くを通ることが避けられない場合は、作業者を誘導する者を決めておき、誘導者が危険を知らせて回避させることも安全対策の一つです。
- ✓ 蓋のある側溝であっても、地震によって外れていたり、痛んでいて人や物が乗ったときに壊れる可能性が考えられます。あらかじめ安全を確認した上で通路を決めてください。
- ✓ 運搬元から運搬先まで、作業中に通る場所の安全を確保してから作業を始め、転落の可能性がある場所是通过らないようにしましょう。

事例13

災害ごみ運搬中、木材から出ていたくぎを踏んでしまい、足裏を負傷した



活動者の情報	30代男性	事故の型	踏み抜き	傷病名（部位）	刺傷（足指）
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・家屋から災害ごみを搬出し、仮置場に持ち込む作業をしていたところ、仮置場で木材から出ていたくぎを踏んでしまい、足裏を負傷した。 ・踏み抜き防止の安全靴やインソールは着用していなかった。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・踏み抜き防止の安全靴やインソールを着用していなかった。 ・通路に散乱している災害ごみにくぎなどの鋭利な物が含まれていることを認識していなかった。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・踏み抜き防止の安全靴又はインソールを着用すること。 ・作業前に作業場所周辺の整理整頓を行い、安全な通路を確保すること。 				



ポイント

- ✓ 今回情報収集した75件のうち、「くぎ」で手や足にけがをして医療機関を受診する事故が3件ありました。古くぎによる刺傷は、破傷風等の感染症を警戒する必要があります。事故に遭わないように、災害V Cが推奨する装備を活動時に着用してください。
- ✓ 運搬元から運搬先まで、作業中に通る場所の安全を確保してから作業を始め、作業中に通路に物を新たに置かないことを徹底することで、つまずきや踏み抜きの事故を予防しましょう。特に、踏み抜き防止の安全靴を履いていない状態で、ごみやごみ袋の上に乗らないことも重要です。

事例14

災害ごみを運搬する屋外活動後、熱中症になり救急搬送された



活動者の情報	60代女性	事故の型	高温・低温の物との接触	傷病名（部位）	熱中症
発生状況	<ul style="list-style-type: none"> ・災害ごみ置場までブロック塀を運搬する屋外活動をしていた。 ・活動終了後、意識が朦朧としており、救急搬送され入院し、熱中症と診断された。 				
考えられる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・真夏の炎天下（35℃以上）で屋外活動を続け、身体に過度の負担がかかっていた。 ・休憩や水分・塩分の補給が不足していた。 ・めまいや頭痛などの症状を我慢して活動続けた。 				
考えられる安全対策	<ul style="list-style-type: none"> ・気象条件（気温・湿度・暑さ指数（WBGT）等）、活動内容、健康状態等を考慮して、活動休止時間や休憩時間を確保すること。 ・気分が悪くなくても定期的に休憩し、水分・塩分をとること。 ・グループで声を掛け合って作業を中断したり交代すること ・体調不良の者に異常を認めたときは、ちゅうちょなく救急隊を要請すること。 				



ポイント

- ✓ 被災地の災害VCでは、熱中症予防のため、こまめに休憩・水分・塩分をとることを励行していますが、まずはご自身による体調管理が大切です。活動を開始する前には、必ず体調を確認し、体調が悪い時には無理に参加しないようにしてください。
- ✓ 内閣府・消防庁・厚生労働省・環境省は、「災害時の熱中症予防」リーフレットを作成しています。ボランティア活動前に本リーフレットを参考にして、安全に活動してください。





事例15

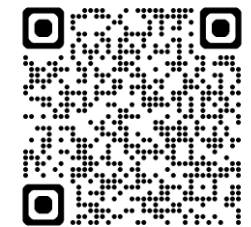
地震により路面が割れていることに気付かず転倒し、腰骨が折れた

活動者の情報	70代女性	事故の型	転倒	傷病名（部位）	骨折（腰部）
発生状況	・ 活動場所への移動中、トイレ休憩で車から下りた際に、深夜で真っ暗だったことから、地震により路面が割れていることに気付かず転倒し、腰骨を骨折した。				
考えられる原因	・ 足下が暗く、路面が割れていることを認識できなかった。 ・ 深夜の移動中の事故で、注意力が欠けていた。				
考えられる安全対策	・ 暗く、慣れない場所では明かりを用意して移動すること。 ・ 被災地は活動場所以外でも危険を伴う場合があることに留意すること。				



💡 ポイント

- ✓ 厚生労働省のホームページによると、労働災害の分野では、令和3年の転倒による災害の3/4（74%）が、移動中に起きており、作業中の発生件数を上回っています。
また、令和5年の転倒災害の半数近く（49%）が50代以上の女性であり、特に女性は加齢とともに骨折のリスクが増大することが注意喚起されています。
- ✓ 地震の被災地では、路面のひび割れや陥没が起き、補修が間に合っていないことがあります。
路面が損傷しているかもしれないという意識を持つことで転倒の防止、重症化の防止につながります。





以下のQRコード
からご確認を！



活動前

事前の情報収集、活動に適した服装・持ち物の用意、ボランティア保険への加入、体調が悪いときは無理して参加しない



活動中

重い物は無理に運ばない（腰痛）、手袋は必ず着用（切れ、こすれ）、足下注意（転倒）、こまめに休憩・水分・塩分をとる（熱中症）、けがや体調不良は必ず災害V Cに報告を



活動後

帰り道も注意（疲れによる集中力の低下）、惨事ストレスを感じたら周りの人に相談を、ヒヤリ・ハッとしたことを他のメンバーとも共有して安全確保



▲ 政府広報オンライン

災害ボランティア 参加する前に
これだけは知っておこう！



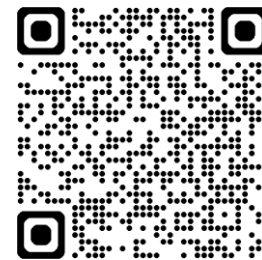
▲ 内閣府

災害ボランティア
関係情報



▲ 石川労働局

令和6年能登半島地震
関連情報



▲ 全国社会福祉協議会

災害ボランティア
活動心得



▲ 中部管区行政評価局

（ホームページ、X）